

茶業産業遺産としての輸出茶用ラベル「蘭字」の研究 ～戦後の展開について新発見の資料から～

The Study of “Ranji” Labels of Japanese Tea for Export as Industrial Heritage
The Postwar History of newly discovered “Ranji”

吉野 亜湖 大石 義
Ako YOSHINO Tadashi OISHI
内藤 旭恵 高橋 等
Akie NAITO Hitoshi TAKAHASHI

(平成28年10月3日受理)

輸出茶用商標ラベル「蘭字」に関する研究は、これまで戦前の資料を対象とし、デザイン史の見地から分析した先行研究が中心であったが、これからは印刷史や茶業史も踏まえ、戦後資料を含めた総合的研究が求められている。そこで、当論文では、2015年と2016年に新出した戦後の日系直輸出会社2社の蘭字資料3点（①日本紅茶株式会社資料、②富士製茶株式会社「登録商標」帳、③富士製茶株式会社資料）について検討を行った。

戦後の新出蘭字資料検討により、印刷技法や紙質の変遷だけでなく、文字がフランス語とアラビア語が主体であるため、日本茶の主要仕向け地が北アフリカとなっていたことを確認できた。茶種についても、中国茶名を打ち出し、「日本茶」である主張がされていないことや、画も日本的なものよりも現地のモチーフが採用されていることから、現地の嗜好や要望に合わせた茶種を既成の製茶機械と技術で製造輸出していたことが読み取れた。

今後の課題としては、デザイン指示書が仕向け地から送られているため、輸出先国の現地調査と、他産地国での茶標ラベルとの比較研究である。

はじめに

江戸時代末の横浜開港に伴い、日本が諸外国との交易を開始した時、茶は絹と並んで戦前の有力な輸出品であった。輸出用の茶箱や包装紙には、浮世絵と同じ木版多色摺りの商標ラベルが貼付されていた。この輸出茶用のラベルを「蘭字（らんじ）」¹と呼んでいる。井手暢子は、『らん』は西洋、『じ』は文字を意味する²ため、絵だけのラベルは「茶箱絵」として分類している。初期の蘭字作りを担ったのは江戸時代から続く浮世絵工房であり、二代歌川広重は「茶箱広重」という異名を持つ通り、腕のある浮世絵師も制作に関わっていた。明治後期より大正期になると、石版印刷の技術も取り込まれていく。さらに、昭和に入ると、オフセット印刷の手法が用いられるようになった。

これまでの蘭字研究については、井手暢子が、1993年出版の『蘭字』において、蘭字を外国商館と日本の浮世絵工房による国際的なグラフィックデザインとして価値付けを行い、

その存在が広く知られるようになった。その後、井手を中心に戦前の蘭字に関する編年研究が進められている³。

2015年には、静岡茶共同研究会（研究代表 小二田誠二静岡大学教授）とフェルケール博物館の共同企画「蘭字と印刷」において、静岡のラベル印刷史としての観点からも、戦後の蘭字研究の必要性を訴え、小二田により同企画展論考集で静岡の印刷史の視点から蘭字が検討された⁴。吉野亜湖は、今後の蘭字研究にとって、主要輸出国であったアメリカでの現地調査の必要性を提言した⁵。その後、同研究会で2017年、台湾の蘭字所蔵施設の調査報告も行い⁶、日本国内所蔵品との比較研究への足掛かりを付けることができたという状況にある。

また、この企画展を機に、日本紅茶株式会社と富士製茶株式会社の戦後の蘭字資料約200枚がまとめて同博物館へ寄贈された。さらに、それを追って、新たに富士製茶株式会社の戦後の蘭字資料約200枚が日本茶輸出組合で発見されたため、2015-2016年の間に、戦後の蘭字資料研究の可能性が一気に広がった。

現在、筆者らは、蘭字を近代の茶業産業遺産と位置づけ、国内所蔵館の蘭字のデータベース化を進めており、2016年度は、静岡県内の所蔵館を中心に作業を行い、以降、全国の所蔵館のリスト化とデジタルアーカイブ化、海外の蘭字も研究対象としていく予定である。これにより後続の研究が進展していくことを期待している。

以上、蘭字研究に関しては、ここ数年で展開の可能性が大きく広がったが、茶業史との関連で読み解くことが、未だほとんど試みられていない。静岡産業大学に寄贈されている国立茶業試験場の研究員であった故森園市二氏の戦後の茶業資料「森蘭文書」や、2016年度袋井市に寄贈された近代の茶業資料「西郷文書」など、これまでに取り上げられてこなかった近代の茶業研究者の残した文書の中からも、関連する事項を照らし合わせ、茶業史と関連付けた蘭字研究を行うことが重要と考えている。逆に蘭字に記載された文字から、当時生産されていた茶種や仕向け地の傾向などを読み取ることで、近代茶業史研究に反映させていくことも可能だろう。

これまで戦後の蘭字研究は、まとまった資料がなかったため、手をつけられていない状態であった。そこで、本稿では、昨年度（2015年）フェルケール博物館に日本紅茶株式会社（現株式会社エム・シー・フーズ）より寄贈されたばかりの戦後の蘭字資料と、本年度（2016年）に新しく発見できた富士製茶株式会社の戦後の蘭字資料を紹介しながら、茶業史との関連から解読することを試み、今後の蘭字研究の可能性についても言及する。



図 1

The Great Atlantic & Pacific Tea Co.,(1859創業)ガスライトを用いていた時代の店頭写真⁷

第 1 章. 蘭字について

1. 概要



輸出茶のラベルである蘭字は、主に、70ポンド（籠茶）か80ポンド（釜茶）詰の木箱とその外に巻くアンペラ（筵）の側面に貼るものを最大とし、40ポンド、20ポンド、5ポンドの茶箱用の大型蘭字と、1ポンド、半ポンドの「ペーパー」、「カート

ン」と呼ばれる袋や紙箱用の小型蘭字がある。今回の調査では、戦後の茶箱用大型蘭字が主に発見されたため、茶箱用の蘭字を研究対象とする。

輸出する際の外箱に美しいラベルを貼る必要性はあったのかという疑問もあるが、図1に見られるように、蘭字を貼った茶箱は、輸出先の店頭でディスプレイされ、茶箱自体が広告の機能を果たしていたのである。

2. 蘭字の構成要素

基本的な蘭字には図2-1に見られるように、(1)ブランド名、(2)絵や装飾、(3)飾り罫、(4)商品情報（生産国名、茶種、輸出先会社名、量など）が刷り込まれている。茶箱の縁張り用の薄紙も様々な文様がある。図2-2は、戦前の茶箱用の縁張り用紙である。戦後になると、縁は金属で留めるようになり、紙の縁貼りが無くなっていく。

	<p>59 cm × 6.8 cm</p>  <p>(静岡市文化財資料館蔵)</p>
図2-1 基本的な蘭字の構成要素 ⁸⁾	図2-2 戦前の茶箱用の縁張り用紙

3. 蘭字に描かれた茶種

蘭字に記載された茶種の変化から当時の貿易事情も読めるため、主な茶種を挙げておく。

- ・PAN FIRED 釜茶：仕上げ乾燥の火入れ工程で鉄釜を用いた蒸し製法の緑茶。中国茶に模して造られ、仕上げ時に中国式の着色が施されていた。（図3-1左上側が戦前の製造工場の様子）着色の濃いものはPAN FIRED、着色の薄いものをSUN DRIED⁹⁾と表記していた¹⁰⁾。図3-2は当時の葉の写真である。
- ・BASKED FIRED 籠茶：主に針のように細長く仕上げた上級な「伸び茶」用で形状を壊さないように籠を用い、手で乾燥作業を行っていた。大正期には、乾燥機も用いられるようになった。日本茶の独自性を打ち出した高級茶であり、その針のような形から「パインニードル」「スパイダーレッグス」とも称された。戦前の製造工場の様子は、図3-1右下側の写真の様子からうかがえる。図3-3は、当時の葉の写真である。内地向けの「煎茶」の仕上げと同じで、摩擦（白ずれ）加工をしない¹¹⁾。
- ・NATURAL LEAF 本色茶（通称アイノ茶）：1876（明治9）年、内務省が内国博覧会跡に製造場を設け「本色茶」という無色茶の製造を奨励した。基本的には籠火入れで仕上げられた。戦後は一般の「煎茶」のことを指した。



図 3 - 1
PAN FIRED, BASKET FIRED仕上げ工場¹²



図 3 - 2
戦前のPAN
FIRED¹³



図 3 - 3
戦前のBASKET
FIRED¹⁴

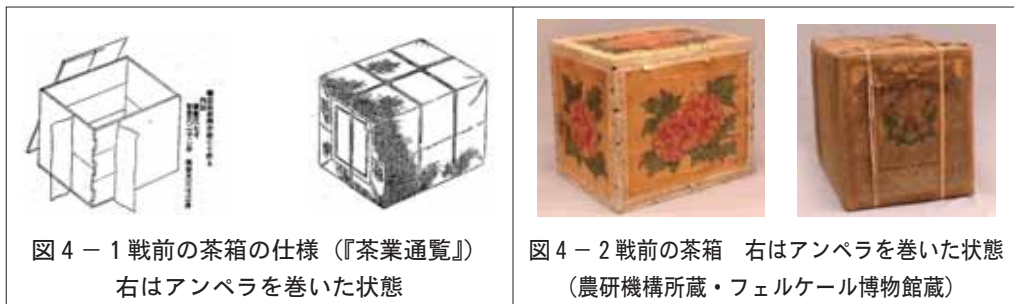
戦後になると、主に以下の茶名が蘭字に登場する。丸まった葉の中国緑茶にそれぞれ似せたもので、中国は釜炒り製であるが日本製は蒸し製法である¹⁵。

- ・HYSON 熙春茶：玉緑茶（グリ茶）より選別した大型の蒸し製緑茶。
- ・CHUN MEE 珍眉：玉緑茶より選別した自然の形でよれた蒸し製緑茶。
- ・SOW MEE 秀眉：玉緑茶より選別した10号篩下の細身の芯をそなえた蒸し製緑茶。
- ・GUN POWDER 珠茶：玉緑茶から選別した中国の丸葉状の茶に似せた蒸し製緑茶。

当初、輸出向けの仕上げ乾燥技術が日本にはなかったため、幕末から明治にかけては、横浜居留地の外国商が雇った中国人技師が着色など仕上げ工場の指導をしていた。戦後も、先行して中国緑茶が流通していた北アフリカ市場に入り込むために、日本茶の製法で、外見を中国茶に模した茶種を輸出していたことが、蘭字の表記からも読み取れる。

4. 戦前の茶箱と蘭字

明治期の茶箱の仕様については、村山鎮『茶業通鑑』¹⁶に詳細が記録されている。それによると、茶箱は杉板を用い、鉛皮¹⁷を内張りする。木箱の「左右前後及蓋に花鳥或は山水風景、種々の意匠又は注文の絵紙を貼して后ち、薄糊を引き乾かし、又煮皮（にかは）を引きて、尚荏油桐油と合せたる油をひくときは、光沢美麗にして且つ堅牢なり」（太字強調筆者）とあり、蘭字ラベルを糊で張り付けた後、油を塗ることをすすめている。その油の調合法についても記載が残されている。また、茶箱に茶葉を詰めたら、茶葉の上に二枚の白い紙か会社の印が入った紙や効能を書いた紙を乗せ、鉛皮を乗せて白蠟で密封したうえで、白紙を置き、木蓋を乗せる。蓋の縁を目貼りし（目貼にも油を引く）、箱全体をアンペラ（筵）でくるみ、木箱のサイズに合わせて縫い合わせ、「前面には荷標番号品名等を印刷せし美麗の薄葉紙を貼付し鉛皮を巻き合わせ、つぎ目に蠟着けし、底は四方を下って中に鉛皮の薄片を入れて蠟着けし、刷毛にて能く打ち込、美麗の煮皮及び油を引くべし、然するときは光沢恰も符簞（あんべら）に印刷せし如くに見ゆるものなり」（太字強調筆者）それから、横二か所、縦一か所に二重に紐をくくる、とある¹⁸。図4-1は同書掲載の図であり、図4-2は戦前の茶箱とアンペラを巻いた茶箱の写真である。



以上の記述を読むと、「美麗」に仕上げることで、そして表面がむしろのため、でこぼこしているアンペラに直接印刷したように見せるような技術を目指したことがわかる。外してしまうアンペラさえも美しく仕上げていたのである。また、現在保存されている蘭字の多くは、薄手の和紙に印刷されている。アンペラ用の蘭字は、直接印刷したかのように見せる目的を持っていたとしたら、薄手の紙が適していたと考えられる。対して、茶箱絵と分類される絵だけのラベル紙は、厚手の紙が用いられていた。図5に見られるように絵だけのラベルには、木目が背景に刷られている意匠があり、木箱に直接印刷したように見せる意図であったと考えられる。このようにアンペラや木箱を美しく仕上げたということは、日本側の印刷技術の高さで日本茶の良質性をイメージさせる広告戦略の意識が、蘭字にあったと考えてよいだろう。



図5 戦前期の木目が刷られているラベル（左）と茶箱（右）

5. 戦後の茶箱と蘭字

戦後の茶箱の仕様は、戦前と比較し、どのようなものであったのか。また、貼り付けた蘭字は、同じく広告としての意識があったのか。資料から検討する。

戦後間もない1948（昭和23）年、フランス商¹⁹と日本の輸出業者（日本紅茶株式会社と富士製茶株式会社も含む）が出席した輸出を円滑に促進させるための会議において、「ラベルを各函に貼布するの件（フランス協会にて制作し日本側の負担で使用し宣伝に供するもの）」²⁰という内容が検討されていた。

さらに昭和25年度の取引に関するフランス商社と貿易関係者の懇談会では、「北アフリカ市場に日本茶を売り込むためには、十分な宣伝をおこなうことが必要であり、したがって日本茶を表示した美麗なレベルとポスターを一函ごとに添付して送ること」²¹と、レベルは宣伝のため「美麗」であることと、「日本茶」の表記を求められていることがわかる。

また、同年、農林省が設定した「輸出茶最低標」²²では、茶箱はベニヤ茶箱の規格が主体に書かれている。以上の文献資料や国内に現存する茶箱の現物（図6）から、戦後はベ

ニヤ板を用い、金属で止める形が主体であったと言える。



図6 戦後の茶箱（フェルケール博物館蔵）

また、貼られている蘭字は洋紙にオフセット印刷となり、縁貼りもなくなり、箱全面に張り付ける形ではなくなった。仕向け地は、側面にラベルではなくステンシル文字で刷られている。

なお、茶業界がモロッコ市場拡大のため国の助成を受けて総力を結集した1957（昭和32）年は、輸出組合指定の登録商標「城」印を一定の統制下で宣伝した²³。検査印ではなく、特定の図柄を品質の保証、延いては日本茶ブランドの確立に使用していたのである。

第2章. 戦後の日本茶輸出事情

1. 北アメリカから北アフリカ市場へ

明治期から大正初期の日本緑茶の輸出最盛期、主たる輸出国はアメリカであった。ところが、1918（大正7）年に第一次世界大戦が終戦し、インド、セイロンからの優良かつ安価な紅茶がアメリカに安定して入るようになると、アメリカ市場での日本緑茶の需要が減退の一途をたどる。危機感を感じた日本茶業界は、茶の大量消費国である北アフリカと中近東方面へと、新市場開拓を目論んだ。同時に、日本輸出茶のパイオニアである茶業組合中央会議大谷所嘉兵衛会頭（当時）も「一番は緑茶（みどりちゃ）、二番は紅茶（あかちゃ）、三番取らずに樹を肥やせ」²⁴と呼びかけ、国内で紅茶製造を奨励し、自ら日本紅茶株式会社²⁵（1917年創設）を設立するなど動きを見せていく²⁶。

北アフリカで特に注目されたのがモロッコ市場であった。大谷嘉兵衛が代表を務める横浜の日本製茶株式会社は、三井物産と販売契約を結び、静岡に事務所を移し、北アフリカ向け輸出を開始した。1932（昭和7）年にはカサブランカに人員を派遣し、モロッコ市場の拡大を図った。そして、紅茶の輸出に関しては、日本紅茶株式会社（三菱商事と組む）²⁷と三井物産²⁸がロンドン向けの市場を開拓するなど、新販路をこの二社がリードしていった²⁹。

このとき作られた下地は、第二次世界大戦後に日本茶の輸出が再開された後も継続される。戦後の対アメリカ貿易は、米国系資本で静岡に支店を置いていたヘリヤ商会とアーウィン・ハリソン商会がその多くを担ったが、北アフリカ市場においては日本の直貿易会社（日本紅茶株式会社、富士製茶株式会社、三井物産など）が中心となってシェアを獲得していた。このことは、図7に見られるように戦前の蘭字がアメリカ向けの英語が主であるのに、戦後はフランス領北アフリカ向け用に、フランス語や中近東の文字になっていく推移からもうかがえる。



図7 日本紅茶株式会社の蘭字資料（フェルケール博物館蔵）

2. 第二次世界大戦中とその直後

第二次世界大戦開戦後は、円ブロック向けの輸出業務を一本化するため、静岡市にあった日本茶直輸出組合を1939（昭和14）年に改組し、日本茶輸出組合（三橋四郎次理事長）を立ち上げた。その後、戦時統制経済の枠組みの中、1944（昭和19）年に日本茶交易株式会社（三橋四郎次社長）が国の受託機関として静岡市（京都、三重、宮崎に支社）に設立されると、日本茶輸出組合はその役目を譲渡し解散した³⁰。

終戦を迎え、GHQによる日本への食糧放出が始まると、アメリカへの見返り物資の一つとして茶が指定された。日本茶交易会社が貿易庁の代行機関として包装から船積みまでを担当することになり、急ぎ、静岡で戦火を免れた仕上げ再製工場が統合され、静岡貿易再製株式会社が設立された³¹。

静岡県内の茶畑は戦時中、食料生産用の畑に切り替えられ、生産量は戦前の三分の一程度に落ちていたため、必要な茶を集めるのも大変な苦労であったと考えられるが、茶箱資材についても、かき集めた経緯が相松義男『紅茶と日本茶』に記録されている。三井物産が、当時日本茶の輸出を一手に担当していた日本茶交易会社から「包装材料が手に入らなくて困っている、三井物産の力で何とかならないだろうか」³²と、第一回分一万箱の材料の注文を請け負ったときの経緯は、茶箱に貼られた日本茶ラベルである蘭字を考える上で、必要材料の記録でもあるため、以下に引用しておく。

「船積期日が近づいても箱がなかったわけで、茶箱の材料のベニヤ板六枚の板を止めるブリキ板（箱の角をブリキ板で覆い釘付けする）、それに釘とリベットを早急に手当てしなければならなかった。（中略）ブリキ板、釘、リベットは本店金物部へ、ベニヤ板は名古屋が合板産業が傘下であったから名古屋支店に電報で引合を開始した。幸い、三井物産は日本製鉄や東洋銅板と取引関係があったのでブリキ板や釘、リベットは八幡から持ってくることになり、ベニヤ板は高山の飛騨合板という工場で所定のサイズに切断して一万箱分を用意した。その後、引き続いてこれらの資材の供給に奔走したが、ブリキ板の在庫が底をつき、東京のストック・ポイントで空襲にあって焼け残ったものの中から良いものを選んで持ってくるなど、モノがあり余っている今日ではとうてい想像できないような商売であった。」

終戦翌年1946（昭和21）年は、以上のような混乱の中の状況で、見返り物資として輸出が再開された当初は、商標ラベルを貼るということもなかったと考えられる。図8は、「MADE IN OCCUPIED JAPAN」とあり、占領下の日本産であることがわかる輸出用茶箱であるが、ラベルはなく、ステンシル文字が記されているのみである。

終戦後最初の輸出用の茶種は、北アメリカ向けに、パンファイヤードとナチュラルリー

フ、北アフリカ向けには中国茶に似せた玉緑茶（ハイソン、チュンミー、ソンミー、ガンパウダー、ブラックグリ³³）とジン（芽粉・芽茶）とパンファイヤード、紅茶（台湾の製品と混合）であった³⁴。輸出量比は、北アメリカ向けが約8万箱に対し、北アフリカ向けは約2万箱と、アメリカ向けの比率の方が多かった。上級茶、中級茶は北アメリカ向け、下級茶はアフリカ向けに当てられていた³⁵。輸出量においては、静岡が中心となって戦後の輸出を担っていた。（表1）

茶園も戦時下の食料統制で縮小されており、再製工場のほとんどが焼失された中での製茶作業であったため、アメリカ市場での日本茶の評判を落とす結果となり、来年度の課題を大きく突き付けられた輸出再開の初年度であった³⁶。

翌1947（昭和22）年は、早くも民間貿易への過渡期的段階をむかえ、輸出は食料貿易公団の静岡支部に一元化された。海外バイヤーがGHQ経由で公団に発注、清水港から最終仕向港へ輸出されるという流れである³⁷。



図8「MADE IN OCCUPIED JAPAN」とある茶箱
（フェルケール博物館蔵）

【表1：昭和21年度見返り輸出向け産地別年産高³⁸】

産地	静岡	三重	奈良	京都	九州	計
函数	74,235	4,470	840	1,710	1,020	82,375
ポンド	7,363,730	452,790	84,000	182,970	100,800	8,184,290

そして、終戦から三年後の1948（昭和22）年には、ついに制限付民間貿易が始まり、自由貿易化の準備段階に入った。食料貿易公団役職員が主体となり、静岡県郡部の再製業者を中心とした日本茶業株式会社（アーウィン・ハリソン商会専属）と、静岡市内の再製業者を中心とした静岡茶業株式会社（ヘリヤ商会専属）の二つが設立された³⁹。この自由貿易化の波にいち早く対応した静岡の茶業者たちの中に、日本紅茶株式会社と富士製茶株式会社もいた⁴⁰。

前述の『紅茶と日本茶』では、当初の対応を「盲目貿易」と称しているが、大手の三井物産であっても戦災で工場や書類を失い、取引先も再編成を繰り返していたため、情報も物資も限られた中での貿易事業であった。その中で、戦前の最大輸出国であった北アメリカはインド・セイロン紅茶が市場の大半を占めており、日本緑茶が割り込む見通しが薄くなり、昭和初期から開拓が始まった北アフリカ、特にモロッコ市場に期待がされるようになっていく⁴¹。

3. 戦後の北アフリカ貿易事情

戦後4年目になると、表2⁴²の通り、北アフリカへの輸出量が、北アメリカ向を上回り、全輸出量の7割以上を占めるようになった。北アフリカへの輸出が好調だった

【表2「昭和24年度日本茶輸出高」（貿易庁調べ）】

仕向地	輸出高(ポンド)	百分比(%)
北アフリカ	11,783,190	71.9
アメリカ合衆国	3,707,298	22.6
カナダ	477,225	2.9
その他	303,953	1.9

理由は、中国の内戦激化で中国茶が不振だったということもあるが、日仏協定により、特定されたフランスの茶商を通した北アフリカへの貿易「フランス・ミッション」が活発になったことも大きな要因の一つであった。静岡の茶業者たちは、フランス・ミッションに、ただ任せていたのではなく、フランスの商社団を招いて茶工場の視察ツアーを行ったり、1950（昭和25）年に海外渡航が許可されると直ぐに、海外派遣茶業使節（大石太郎兵衛）を派遣し、市場調査を行う⁴³など、販促のための努力を常に怠らなかった。

また、1950（昭和25）年のフランス商社代表団との会合では、宣伝のため「美しいレベル」⁴⁴とポスターを送る、という取り決めを行った。つまり、蘭字自体も広告であり、美麗であることで日本茶の販促になるという認識を、フランス側も日本側もこの時点から持っていたということがわかる。

1952（昭和27）年には、茶園面積が戦前並みに復帰し、生産量も全国で48,750トンと増加した。1953（昭和28）年には、輸出量もほぼ戦前の水準に達した。

品質面においても、現地の嗜好調査を参考に生産指導がなされ、中国茶に類似した茶を製造する努力が重ねられてきた⁴⁵。北アフリカでは、日本の蒸し製法緑茶の青味を好まないため、仕上げ火入れを強くした製法を推進し、ガンパウダーが次第に大量に輸出されるようになっていく。茶業界では、現地の嗜好研究や情報収集を行うため、元カサブランカ貿易幹旋所長などによる北アフリカ事情講演会を開催したり、静岡県輸出茶協会常任理事西郷昇三氏を現地調査に派遣した⁴⁶。さらに茶業界から、輸出が伸びてきているモロッコとアルジェリアなどの北アフリカへの領事館の設置を国に要望した⁴⁷。1949（昭和28）年には、民間商社（BA商会）から北アフリカ方面への長期視察員が派遣され、日本茶輸出組合の事業としては日本紅茶株式会社を含めた輸出茶商の代表団に現地調査を依頼し、かつ現地情報を得るため、カサブランカ地元の通信員を雇ったり、航空便で仕向け地の茶況情報誌を取り寄せ、速報を関係者に届けていた⁴⁸。

1958（昭和33）年に、日本茶輸出組合は、モロッコでの宣伝事業の政府助成を受け、モロッコとの通商協定を進めた。その結果、モロッコのリン鉱石（肥料の材料）約300万ドルを日本側が輸入することで、モロッコへの日本茶250万ドルの輸出ライセンスを得るというリンク貿易の条件で「日・モ通商協定」の締結に至る⁴⁹。しかし、この通商協定は、当時の新聞をも賑わす大議論を引き起こすことになる。協定により、日本茶の輸出を拡大させるためには大量のリン鉱石の輸入が必須となったため、当時モロッコのリン鉱石輸入の独占権を持っていた三井物産に対しては「政治家を使って恐喝まがいに第一物産（三井物産）に対しリン鉱石の買い付けを迫ったり」⁵⁰、三井物産の競争相手である三菱商事にもリン鉱石輸入に介入するよう働きかけたりと、市場拡大を急ぎ、商社間に混乱を招いたのだ⁵¹。さらに、この協定では、いくらリン鉱石の輸入を強行しても、日本茶の輸出量は保証されないという問題点を含んでいた。つまり、リン鉱石の輸入量に比例して、日本茶輸出量の「ライセンスを与える」というだけのもので、モロッコ側には購入の義務はないのである。リン鉱石購入のリスクが十分保証される利益も見込まれないため、業界全体を巻き込んだ激しい折衝の結果、リン鉱石の購入の損失は三井物産一社が全て請け負う代わりに、リン鉱石購入額に対してモロッコへ輸出できる日本茶の全体量の内、2割は三井物産が輸出できる量として保証し、輸出窓口は三井物産に一本化することで落ち着いた⁵²。図9の当時の茶業新聞に「難航極めた割り当て」と題され、「漸く決定はしたが最後まで

激しい折衝の行われたは燐鉱石輸出商社への割り当て提供のワクであった。」と記事が始まり、その割り当て結果が報告されている。

翌年から、カサブランカ市内に図10の日本茶喫茶店を設け、「日本茶センター」とし、茶業界あげての現地の宣伝活動を始まった。



4. 日本紅茶株式会社と富士製茶株式会社

第3章で資料検討する、日本紅茶会社と富士製茶株式会社は、表3を見ると、日本資本のトップが富士製茶株式会社であり、「日本紅茶会社」は4位と、明治から大正期に設立した輸出業者として、戦後も業界の上位にいたことがわかる。さらに、両社とも戦後も新しい輸出先北アフリカに積極的な動きを見せていたことが蘭字からも読み取れる。

図11は、1958（昭和33）年以前に登録されている富士製茶株式会社の蘭字一覧であるが、日モ通商協定が締結される以前にあたる1954（昭和29）～1958（昭和33）年に、既に北アフリカ向けの輸出茶ラベルの商標登録を申請登録していたことがわかる。第3章で詳細を述べるが、日本紅茶の年代が特定できる蘭字は、1951（昭和26）年からある。両社とも組合が動きを見せる前から、輸出をすすめていたことが読み取れる。



図11 富士製茶株式会社「商標登録」帳より1958年以前申請の蘭字（フェルケール博物館蔵）

表4と5は、日本紅茶株式会社発行の冊子『紅茶』と、『日本紅茶株式会社』に掲載された1951（昭和26）年と1954年（昭和29）の同社の輸出先の一覧表である。これを見ると、日本紅茶株式会社は、1951（昭和26）年には、北アフリカ地域の輸出の割合が大きくなっ

ていることが分かる。

【表3 「昭和31年の日本茶輸出における
主要商社の取引高」】（単位：ポンド）⁵⁵

商社	取扱高
ジャーディンマセソン会社	2,451,715
富士製茶株式会社	1,816,992
三井商事株式会社	1,643,102
ヘリヤ商会	1,421,512
アウィン商会	1,345,175
B A 商会	1,305,200
日本紅茶株式会社	1,218,237

【表4 昭和26年
日本紅茶株式会社

主な緑茶輸出先と割合】

輸出先	割合
モロッコ	17%
ダンヂール	10%
アルジェリア	45%
ゼネガル	65%
インド、中国	11%
パキスタン	4%
アメリカ	1%
サウジアラビア	2%
その他	4%

【表5 昭和29年
日本紅茶株式会社

主な緑茶輸出先と割合】

輸出先	割合
仏領モロッコ	40%
アルジェリア	21%
チュニジア	7%
リビア	6%
イギリス	11%
フランス ミッション	8%

以上、第2章では、戦後の輸出最盛期の茶業史の概略を記した。第3章において、この輸出茶業史を踏まえ、日本紅茶株式会社と富士製茶株式会社の蘭字資料の検討を行う。

第3章. 戦後の蘭字新資料

蘭字は、商標ラベルという性質上、使用後はその多くが廃棄されてきた。昭和30年代後半に輸出業が斜陽となると、多くの輸出茶業関連の会社の解散、合併、移転などにより、ラベルも処分されていることが多く、まとまった資料が、今までは皆無に近い状態であった。

ところが、2015年に、株式会社エム・シー・フーズより、前身であった日本紅茶株式会社から引き継いだ戦後の蘭字資料が、周辺資料と一括でフェルケール博物館に寄贈された。これを資料①とする。同時期に、日本茶輸出組合より、富士製茶株式会社の蘭字「登録商標」帳が、同博物館に寄贈されるに至った。これを資料②とする。以上が、2015年度に調査できた戦後の蘭字資料になる。その翌年、上記の日本茶輸出組合が事務所移転にあたり、富士製茶株式会社の蘭字資料が倉庫に保管されていたのが見つかったという知らせを受けるに至った。これを資料③とする⁵⁶。

本章では、以上の2015年から2016年にかけて新出した、資料①日本紅茶株式会社の戦後の蘭字、資料②富士製茶株式会社の蘭字登録商標帳、資料③富士製茶株式会社の戦後の蘭字の調査報告と、①②③の資料検討を行う。

1. 資料①日本紅茶株式会社の戦後の蘭字

(1). 日本紅茶株式会社の沿革

日本最初の紅茶製造会社である日本紅茶株式会社は、大谷嘉兵衛、中村円一郎、尾崎伊兵衛、笹野徳次郎、長井利左エ門を役員に、静岡の有力者を20余名集め、1917（大正6）

年、静岡市北番町に創立された。図12は、昭和初期の会社の全景写真である⁵⁷。1915年に静岡市安西町に茶業中央会議所が設立した「紅茶研究所」の事業を引き継ぎ、静岡県茶業連合会議所と中央会議所の補助を得て紅茶製造の研究と製造販売を手掛けた。1929（昭和4）年には、ソ連の輸出茶検査員であったシェーニング氏の指導を受け、翌年に静岡市沢渡に工場を移し、機械設備を充実させ、三菱商事を通じて輸出を開始した⁵⁸。第二次世界大戦中に輸出が止まると同社は一旦解散したが、国内向けに活動していた株式会社二光商会を商号変更し、1943（昭和18）年に日本紅茶株式会社（三橋四郎次社長）として再編された⁵⁹。戦後は北アフリカ市場を開拓し、国内向けには「ヒノマル紅茶」というブランド名で販売した。（図1）1970年代にブルックボンド社と提携、1976（昭和51）年には株式会社静岡山本山（山本山・日本紅茶・三菱商事で1971年に設立）を吸収合併し、緑茶部門を朝日茶業株式会社として分離した。2000年（平成12）年より株式会社エム・シー・フーズが事業を引き継ぐ⁶⁰。



図12日本紅茶株式会社全景

(2). 資料数と特徴

2015年にフェルケール博物館に寄贈された日本紅茶株式会社関係資料は、株式会社エム・シー・フーズが保管していた戦後のパンフレット等も含む全191点、その内、蘭字は178点である。木版印刷の蘭字は13点、オフセット印刷の蘭字資料が165点である。中には印刷指示が記載されているものや、「手刷り」と書き込みがある試作印刷の蘭字や版下絵も含まれている。本稿では、オフセット印刷の蘭字資料（見本や試作、版下絵も含む）165点を、資料①日本紅茶株式会社の戦後の蘭字として検討する。

日本紅茶株式会社の蘭字資料の特色は、輸出会社の発注書、校正時の資料や版下、指示書などが保存されているということである。また、図13のように年号が書いてある封筒に納められたものや、蘭字に直接年月日が記載されている資料もあり、年代の特定ができるものが比較的多い。



図13封筒に指示書と共に納められた蘭字資料

(3). 年代の記載があるもの

日本紅茶株式会社の戦後の蘭字資料に関しては、印刷見本も含まれるため、蘭字の裏などに年号の記載があるものが41点（封筒は数に含まず）あった。年代記載のある資料の一覧を表6に示す。

【表 6 日本紅茶株式会社蘭字 年代記載がある資料一覧】

No.	資料名	年	備考
1	蘭字 BUTTER-NUT	1951	
2	蘭字 CHUN MEE (仏塔)	1952	
3	蘭字 INDIAN CHIEF	1952	
4	蘭字 ELEPHANT(Sow mee)	1952	
5	蘭字 NICE	1952	
6	蘭字 FER A' CHAVAL	1954	
7	蘭字 LU MOULIN ROUGE	1954	
8	蘭字 LE DAMIER	1952	
9	蘭字 THE' LE PHONOGRAPHE	1952	
10	蘭字 LE SOLEIL	1951	
11	蘭字 TARTAN	1952	
12	蘭字 MOON STAR	1952	
13	蘭字 THE KAAS EL KHEIR(多色摺り)	1953	
14	蘭字 ライオン(褐色) 3 頭	1952	
15	アラビア語	1963	
16	蘭字指示書 MILLE & UNE NUIT	1953	
17	蘭字指示書 VIOLON	1953	
18	蘭字指示書 SERVIS A' THE	1953	
19	蘭字 LE MOULIN ROUGE	1954	日本紅茶(株)専用封筒29点入 「Alexandre Karsenty」 「27. 5 .10」
20	蘭字指示書 LE MOULIN D'OR	1953	
21	蘭字指示書 THE' LE PHONOGRAPHE	1952	
22	蘭字 NAOU EL KHEIR	1953	
23	蘭字 KITTAR ESSAHRA	1953	
24	蘭字 WF	1952	
25	蘭字 A/L/U	1952	
26	蘭字見本 (5 つ星)	1952	
27	蘭字 the' DE LA "ZIARA"DE SIDI ABED	1953	
28	蘭字 95	1952	
29	蘭字 SULTAN	1953	
30	蘭字 SULUTAN	1952	
31	蘭字(小) LE TOUAREG	1952	
32	蘭字(小) LE MOISSONNEUR	1952	
33	蘭字(小) ANTAR	1952	
34	蘭字見本 EL HEDJAJ	1952	日本紅茶(株)専用封筒 6 点入 「DISMAC」「27.5.24」
35	蘭字指示書 L'AGMA	1952	
36	蘭字指示書 95	1952	
37	蘭字指示書 LE CAID	1952	
38	蘭字 手書き指示書	1952	
39	蘭字手書き指示書 (LES 4 AS)	1953	日本紅茶(株)専用封筒 3 点入 「Tunijia Naduy lo Label」
40	蘭字指示書 THE'DE LA "ZIARA"DE SIDI ABED	1953	
41	蘭字指示書 LE MAROCAIN	1953	

なお、封筒 3 点に入っていた蘭字資料の中で、年号が記載されていないものは、このリストに入っていない。封筒に同封されている資料は全て同年のもの、と分類するのであれば、特定できる資料数が15点増えることになる。表の備考欄に同封の総資料数を示した。その他、消印で年代がわかるものは、「Hotel Noailles」の封筒に「20- 3 . 1953」の消印があり、その中に 6 点の小型蘭字資料が同封されている。手書きで「急がぬがなるべく早く」と指示書きがあるため、これらの絵と一致する蘭字が印刷され始めた年代特定もある

程度可能と考えるが一覧表には、明記してある資料以外は示していない。

表4に示した通り、1951（昭和26）年から1954（昭和29）年の記載も見ることができるため、組合により日モ通商協定が締結される昭和30年代以前から輸出市場を開拓していた様子が読み取れる。

(4). 茶種

日本紅茶株式会社の蘭字に記載されている茶の種類を一覧表にしたものが表7である。

日本紅茶株式会社長袖原慶二の北アフ리카市場調査の報告⁶¹にも、モロッコ、アルジェリアの茶商が要求する主な茶種は、GUN POWDER、CUN MEE、SOW MEEであると記されており、蘭字の茶種と重なる。さらに、アルジェリアでは価格が安いものが求められており、PAN FIRE Dの需要もあるが、モロッコは、品質に対する要求が強く、CUN MEEが第一位、第二位がGUN POWDER、最下級がSOW MEEという分類で、需要もその順で、50

%、25%、10%となっている。譲原の報告は詳細にわたり、各茶種の外観の色彩、外観の特色を述べ、外観が第一であること、水色と味香についても、どのようなものが求められているのか子細に報告している⁶²。

注目すべきは、茶種以外に、戦前は「JAPAN TEA」（日本茶）という表記がほとんどの蘭字に記載されていたが、「JAPON」の文字が入っているものは指示書きを含め5種にすぎないということである。

【表7 日本紅茶株式会社の蘭字の茶種一覧】

茶種名	数
GUN POWDER	26
CUN MEE	21
SOW MEE	14
PAN FIRED	1
JIN	2
THÈ VERT(緑茶)	15
GREEN TEA	2
THÈ NOIR(紅茶)	3
不明(THÈ のみ、絵のみも含む)	81
合 計	165

(5). 絵の傾向

試し刷りや印刷指示書も含めた蘭字165点中、現地の男女、現地の景色と人など、人物をモチーフにしたデザインが41点と最も多く、鹿、象、孔雀、ダチョウ、ラクダなど動物が主体にデザインされている蘭字が34点と続く。昆虫系は蝶の絵の1枚だけであった。現地の仏閣や建物は15点。月、星、太陽の絵柄は12点。その他（風船、飛行機、チェス盤、ダイヤモンド、バイク、バイオリン、蹄鉄、飛行機など）は42である。絵は無く文字がメインのものは15枚で、マーク（丸など）だけのものは5点であった。

戦前の蘭字には多く見られた日本的なモチーフは、図3左の厳島神社の絵1枚だけで、他の多くは、図14の右三枚のように現地の人物や建物が描かれているのが特色である。



図14 日本紅茶株式会社の蘭字（フェルケール博物館蔵）

(6). 仕向け地

英語表記の蘭字が2点のみで、他はフランス語か中近東の言語のため、ほとんどが北アフリカ用の蘭字であると考えてよいだろう。

(7). その他

前述のとおり、日本紅茶株式会社の蘭字資料は、指示書と共に見本刷りなどが保存されているところにある。

図4は、15-1には鉛筆で「SERIE NO」と記載があり、その指示通り印刷した状態が15-2の蘭字であろう。同様に指示書きとその見本刷りが揃っているものが数点ある。

現地からのデザイン指示書16-1と共通の絵を持つ蘭字が16-2である。現地からの指示に基づき、日本で印刷していたと考えられ、女性の顔が、彫の深い顔から平面的な顔に変化していることが見て取れる。また、この蘭字は数少ない「JAPON」の記載ある蘭字の一つである。

<p>図15-1「SERIE NO」と手書き指示あり</p>	<p>図15-2 手書き指示の通り印刷されたもの</p>	<p>図16-1デザイン指示書（女性の顔の彫が深い）</p>	<p>図16-2印刷された蘭字（女性の顔が平面的）</p>

図17は、「CHINE」から「JAPON」へ書き換えるように指示書きがある蘭字資料である。中国茶の市場に入っていた様子がこの文字からも読み取れる。

図18-2の4枚には、それぞれ「赤」「キ」「草」「茶」と色指定があり、色指定を書いた版下が保存されている。4枚を合わせた絵が18-1である。

蘭字の他、手紙類も保存されており、「チャロンに校正」と手書きされた指示書（図

19)、「チャロン」からの返信の手紙があるため、これらをもとに互いの指示の流れを追うことも可能であろう。

			
図17「CHINE」から「JAPON」の手書き指示あり	図18－1 版下	図18－2 色指定あり	図19「チャロンに校正」とあり

以上が資料①日本紅茶株式会社の戦後の蘭字資料の概要である。

2. 資料②,③ 富士製茶株式会社の戦後の蘭字

(1). 富士製茶株式会社の沿革

1888（明治21）年、丸尾文六、安田七郎、尾崎伊兵衛と原崎源作により富士商會が設立された。サンフランシスコ 5 番街120に支店を設け、日本茶の直輸出に従事した。1893（明治26）年、原崎源作が原崎式再製釜を発明したことで、機械による再製作業を自社で行うようになった。大正15年の時点で再製作業と輸出を兼営していた静岡市内の輸出会社は、米国商社ではヘリヤ商会のみで、日系では富士製茶会社の一社のみであった⁶³。1930（昭和5）年に、天皇陛下が静岡県内行幸時に、作成された工場の図面と、行幸写真帳に茶箱詰めの作業の様子が残されている。図22の図面の右上に、「製函工場」「製材製函場」「切組置場」「板置場」の文字が見られ、中央下には、「輸出用絵函置場」とある。また、図20と21の写真には実際の作業の様子もあるため、再製だけでなく、茶箱の製造と蘭字を貼る作業も自社内で行っていたとわかる。

富士製茶株式会社は昭和後期は輸出業から国内卸へと転換し、2005年に解散した。



図20「輸出茶荷造」



図21「袋詰め」

（『富士製茶行幸写真集』静岡県茶業会議所蔵）



図22 富士製茶会社の昭和初期の図面（「富士製茶株式会社再製茶工場行幸御巡路図」⁶⁴）

(2). 資料数と特徴

資料②：2015年に日本茶輸出組合フェルケール博物館に寄贈された同社の「登録商標」帳には、61種類の蘭字が保存されていた。その中には、登録年月日が記載されている蘭字が17種ある。その内、戦前の登録が4種であるが、オフセット印刷の状態では保存されている。登録商標帳が残されていることで、登録年号が確定できる蘭字資料が出てくるため、非常に貴重な資料と言える。

資料③：2016年に日本茶輸出組合で調査した同社の蘭字資料は、バラの状態では76種類保存されていた。数枚ずつあるものも多く、総数は200枚程度になる。

資料①日本紅茶株式会社の蘭字は、そのほとんどが1種類につき1枚ずつしか保存されていなかったのに対し、資料③は複数枚数の保存が多いという特徴がある。

なお、②と③に重なってあった蘭字（色違いや文字、サイズの違いがあるものは別種類としてカウントした）は、9種あった。

(3). 年代の記載があるもの

資料②は「登録商標」帳（図23）のため、年代が記載されファイルされている。表8に、記載されている「出願年月日」と「登録年月日」、「終了年月日」を一覧表にした。記載無い場合は横棒で示した。（「外国名」と「日本名」は登録商標帳のまま）

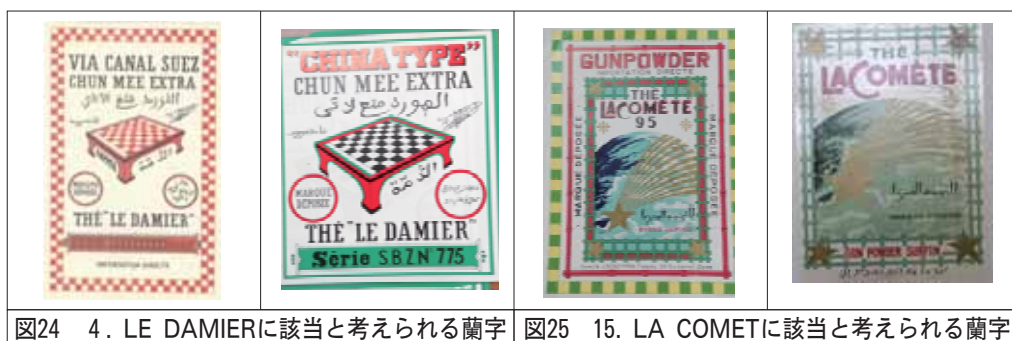


図23 富士製茶株式会社「登録商標」帳（フェルケール博物館蔵）

【表 8 富士製茶株式会社「登録商標」帳蘭字の登録年月日一覧】（年号は昭和）

No.	外国名	日本名	出願年月日	登録年月日	終了年月日
1	TOUREU	亀	—	14/ 6 /19	34/ 6 /16
2	EMPEREUR	皇帝	—	35/ 8 /11	55/ 8 /10
3	ETOILE DU MATIN	暁星	—	14/ 4 /11	34/ 4 /10
4	ALOUETTE	—	35/ 3 /18	35/12/10	—
5	MOINEAU②	—	35/ 3 /18	35/ 7 /10	—
6	COQ	鶏	—	12/ 9 /12	32/ 9 /16
7	OIE SAUVAGE	野性ノ鷺鳥	—	12/ 9 /17	32/ 9 /16
8	RABBITS	兎	—	29/ 9 /14	49/ 9 /13
9	PINSON	カワラヒワ	—	29/ 9 /14	49/ 9 /13
10	LE LOUP	狼	—	29/ 9 /14	49/ 9 /13
11	POUSSINS	ヒヨコ	—	30/ 9 /21	50/ 9 /20
12	AS CARD	トランプ	33/ 9 /24	登録せず	—
13	LE CAVALIER	騎士	35/ 9 /24	—	—
14	LE DAMIER/CHESSBOARD	西洋基盤	33/10/21	34/11/16	—
15	LA COMETE/COMETTE	彗星	33/10/21	34/11/16	—
16	BANCHA	御番茶	33/12/16	—	—
17	無シ	婦人の眼	34/ 1 / 9	35/ 7 / 5	—

「登録商標」帳は、14. LE DAMIER/CHESSBOARD（西洋基盤）と、15. LA COMETE/COMETTE（彗星）の蘭字見本が添付されていない状態で寄贈されたが、2016年に新た日本茶輸出組合から発見された富士製茶株式会社の蘭字資料③（「商標登録」帳以外）の中の文字を照らし合わせると、以下の2点（図24と25）がそれぞれ該当すると考え、この2点は年代特定ができる蘭字に分類する。



17. 「婦人の眼」については、「外国名」が「無シ」という記録のため、画の情報から図26の2点のどちらかが該当するのではないかと推測するに留めておく。



資料③の蘭字資料の中で年号が記載されていたものは以下の図27～32の6点である。図27は商標登録帳のRABBITと同じ絵である。「新規」と記載があることから、1958年4月に制作され、登録が9月14日に完了したものだと考える。

図27	図28	図29	図30	図31	図32
「APR-2.1958 新規」	「MAR26.1958」	「OCT-5.1959」	「1960年1月 以降」	「1958年10月 作成及び発送」	「APR15.1968」

以上、②と③を合わせると、富士製茶株式会社の戦後の蘭字資料で年代の記載があったものは、全16種であった。

(4). 茶種

資料②と③の富士製茶株式会社の蘭字に記載されている茶の種一覧表を表9に示す。

【表9 富士製茶株式会社の蘭字の茶種一覧】

茶種名	数
GUNPOWDER	9
CUN MEE	12
SOW MEE	9
THÈ VERT(緑茶)	13
PAN FIRED	1
JIN	1
HYSON	2
TEA/ GREEN TEA	3
NATURAL LEAF JAPAN TEA	1
JAPAN TEA	6
BANCHA	2
不明 (THÈのみ、アラビア語のみ、英語1含)	78
合計	137

富士製茶株式会社の資料②③には、英語表記の蘭字も一部あったが、「日本」という文字の記載はJAPONが9、JAPANが4と、日本紅茶株式会社より若干多い。「BANCHA」という日本茶名と一致する小さな蘭字もあった。また、日本語で「精選銘茶」と書かれているものがあるのも富士製茶株式会社の蘭字の特徴と言える。

なお、図5に示した蘭字には「SAN FIRED」という文字があったが、PAN FIREDのミスか確定する根拠がないため、不明(「THÈ」のみ)の数中に入れた。(図5)



図33 「SAN FIRED」の記載ある蘭字

(5). 絵の傾向

一番多いのは、動物(鹿、虎、ライオン、鷹、孔雀、ラクダ、七面鳥、金魚、狼、トカゲなど)で、人物(日本人女性、モロッコの女性、中国人男性、将軍、騎士など)植物(薔薇、百合、ヤシの木など)、も採用されている。その他は太陽や星、トランプ、ポット、ダイヤモンド、電話機、チェスボードなどが用いられている。

また、図32のように初期蘭字の約束である縁絵(飾り罫)があるデザインがあるものも数枚あるが、ほとんどが図33のように戦後に多く見られる縁絵なしのデザインであり、図34のように富士製茶株式会社のロゴマークが入った蘭字もあった。



また、図37に示したような日本的な絵（着物の女性や茶摘み風景）と、中国人のモチーフもあった。



(6). 仕向け地

北アメリカ向けと考えられる英語表記の蘭字は、8種であった。図38はその一部である。その他はすべてフランス語、または中近東の文字が記されているので、北アフリカ向けが9割以上と言えよう。



以上が、富士製茶株式会社の資料②と③の概要である。

第5章. 考察と課題

偶発的に、2015年から2016年にかけて、戦後の蘭字資料が静岡県内に集積され、今後の蘭字研究の発展へと確実につながる状況となった。

4章で検討した通り、日本紅茶株式会社の蘭字資料は、指示書と共に、図39のような見本刷りなどが保存されている。これから戦後のラベル印刷業に直接関わった古老からも聞き取り調査を行い、できるだけ資料について詳細情報を残していかなければならない。

さらに、日本紅茶株式会社の資料には、取引先の会社名が記された出入帳も含まれていた。今後は、今回検討した蘭字資料と合わせて、共に寄贈された資料を検討することで、より日本茶業近現代史を具体的なものにしていくことができるだろう。



図39 日本紅茶株式会社 見本刷り紙
(フェルケール博物館蔵)

(1). 編年研究について

蘭字における編年研究は、年代記載や作者名があるものは極少なく、先行研究者の井手暢子氏により、戦前のものは、印刷手法（木版、石版、オフセットなど）、紙質、絵の具（インク）の材料や、レタリング文字の出現年代による分析に加えて、会社名や版元から、明治初期、明治後期など、年代を推定するということが行われてきた。その他、日本茶業中央会に所蔵されている蘭字の綴り帖（図40）には購入年が書いてあるため、この資料については、「それ以前である」という程度の区切りはつけられる。また、四日市印刷工業株式会社には自社で印刷した蘭字の綴り帖（図41）が残されており、そこには年号も記載あることと、自社資料のため印刷会社まで特定できるという大変貴重な戦前の蘭字資料である。同様に、菊川文庫の「茶袋画面纏」は、「明治21年」とあり、神戸居留地28番オッペネメールフレール商会一社のものだとわかる資料の一つであるが、このような例はほと

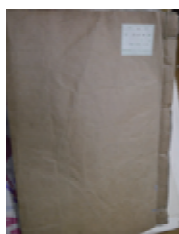


図40
購入年が記載された資料
(社)日本茶業中央会蔵)



図41
印刷年を記載した綴り
(四日市印刷工業(株)蔵)

んど他に見当たらない。

しかし、本論で検討した戦後の蘭字資料に関しては、輸出元が分かっていることに加え、一枚ずつ、使用された年月日、そして登録年月日まで特定できたものもある。

(2). 2社共通の蘭字資料

日本紅茶株式会社（資料①）と、富士製茶株式会社（資料②,③）における蘭字資料で、両社共通のデザインが3種あったので、図42に示す。日本茶が輸出されるにあたり、海外の大量の注文に一社では対応できず、数社で対応をせざるを得なかったと推測され、同一のデザインの蘭字は行先が同じと考えて良いだろう。



(3). 世界における日本茶の位置

戦後、日本輸出茶業界をリードしていた2社の蘭字を読み、日本的な絵が戦前に比べて少ないこと、「JAPON」と日本茶であることが明記されているものが、ほとんどないことがわかった。戦中に日本茶の輸出が止まっていたため、戦後は中国茶が席卷していたアフリカ市場に食い込もうと、中国茶の模倣品を製造し、安価な嵩増し用の混ぜ茶としての役割も担っていたので、「日本茶」の文字はそれほど重要でなかったであろう。

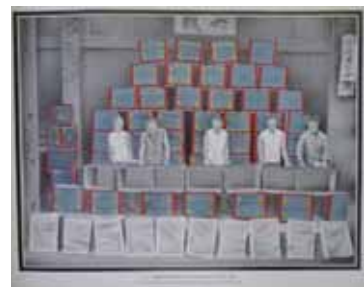
また、英語表記からフランス語、中近東の文字へと変化し、戦後は主な仕向け地がアメリカからアフリカ市場へと変化したことが蘭字からも見られた。

(4). 今後の課題と可能性

今後の蘭字研究の課題として、海外の現地調査の必要性があげられる。一つは他の茶産地国との比較研究であり、もう一つは輸出先つまり消費国での調査である。

他の茶産地国の一つ、台湾での茶箱絵は、図43に見られるように、手描きで直接箱に着色されていた様子が写真に残されている。2016年度に筆者らが行った現地調査でも手書き彩色の茶箱絵を確認できた。台湾では中国茶の手法を踏襲していたと考えられるため、同時期に木版多色刷りをしていた日本との印刷技術の差を見ることが出来るだろう。このように、他の茶産地

図43日本統治時代の台湾における
蘭字の色付けの様子



『FORMOSA OOLONG TEA』1904
(静岡県茶業会議所蔵)

との比較研究を行うことで、より日本の蘭字資料の特徴や系譜が明らかになっていくだろう。

また、アメリカなど主要輸出先に現存する輸出会社や茶箱の資料の調査は未着手であるため、2017年度は、消費国での蘭字の展開や日本茶の受け入れの様子を、現地調査する予定である。

そして、国内調査における課題も残されている。筆者は、2013年度、2014年度の2年間、静岡県茶業産業遺産の調査委員（静岡県茶業農産課依頼事業）として、県内の茶業関係団体や生産地や工場などを調査し、研究者の手が付けられていない貴重資料や、製茶機械類、近代の茶工場のリスト作成を行ったが、これほど近代の茶業資料に恵まれた県は他にないと実感した。この調査で改めて認識したことは、近代から現代の茶業資料は、価値付けが専門家により行われていないものは放棄されるということ、そして、たとえ価値付けがされていても保管場所がなければ次々と、文字通り次々と、目の前で散逸していくということであった。特に戦後資料に関しては、産業遺産としての認識がないケースが多くみられた。蘭字を含め、戦後資料も静岡県の茶業産業遺産として意識され、散逸や放棄を逃れ、一括して保管されていくことで、今後の茶業文化研究の発展を期待する。

静岡は、日本茶輸出の中心地であったという歴史文化を、蘭字の周辺資料を読み解くことでも再認識できる。蘭字研究をきっかけに、当時の茶専門雑誌や茶業史資料、まだ手付かずの個人研究者が残した資料の研究も同時に進めていくべきだと考えている。喫緊の課題として、筆者らですすめている蘭字のデジタルアーカイブを公開し、産業遺産なるものを、研究の場や保存することだけに留めておくのではなく、市民への展示公開や、観光活性、地域活性など活用へとつなげていくことが重要だと考えている。

-
- 1 「蘭字」という呼称は、戦後の茶業界での使用が井手暢子らの聞き取り調査により確認されているが、大正期の資料から見られる。『静岡県茶業史』, p449, 静岡県茶業組合聯合会議所, 1916や、富士製茶株式会社原崎源作の静岡県立静岡商業学校講演記録『輸出再製茶並ニ其沿革』静岡県再製茶業組合, 1925にも「蘭字」という用語が使われていたこと記載されている。（「釜茶なれば正味80封度、籠茶なれば正味70封度のハーフチェストに容れ、鉛袋を用い安平にして藤で縛り上げ蘭字（商標）を貼り又は行先等刷り込みをなして輸出いたします。」）
 - 2 井手暢子『蘭字 日本近代グラフィックデザインのはじまり』p3, 電通, 1993
 - 3 井手暢子による蘭字に関する主要論文は以下である。「『蘭字』主題と詳細」『常葉学園短期大学紀要』, 第22号, p251-278, 1991/「『蘭字』の変遷と年代分類」『常葉学園短期大学紀要』第24号p215-231, 1993/「神戸オペネメール・フレール商会デザイン資料」『常葉学園短期大学紀要』第22号p209-224, 1998/「輸出茶票『蘭字』—日本近代デザインの中の位置」, 『アジア民族造形学会誌』, (11), p15-20, 2011
 - 4 小二田誠二, 「静岡の印刷と蘭字」, 『蘭字と印刷』, p43-48, フェルケール博物館, 2015
 - 5 吉野亜湖, 「アメリカに渡った日本の茶箱」, 『蘭字と印刷』, p56-59, フェルケール博物館, 2015

- 6 井手暢子「台湾における蘭字ラベルの現地調査」、『茶』，4月号，p48-49，5月号，p44-45，2016
- 7 W.H.Ukers, 『ALL ABOUT TEA』，II，p263, Tea & Coffee Trade Journal, 1935
- 8 『蘭字 輸出茶ラベルの100年』p1，第6回世界お茶まつり実行委員会，2016
- 9 田中清左衛門『茶製家必携製茶緊要方法録』，1887には、サンドライドは箆で火入れ仕上げをし、「火気のない釜で薬品をいれる」とあるが、原崎源作『輸出再製茶並ニ其沿革』静岡県再製茶業組合，1925には、サンドライドも「釜茶」とある。
 なお、サンドライドが出てくると、パンファイヤードは「レギュラー」と呼ばれた。
 (『日本茶貿易概観』p73，茶業組合中央会議所，1935)
- 10 原崎源作『輸出再製茶並ニ其沿革』静岡県再製茶業組合，1925に、「1911（明治44）年以降、着色が禁止され、機械化されていった。」とある。
- 11 『紅茶百年史』p601，，全日本紅茶振興会，1977（『日本茶業史資料集成』第十九冊）
- 12 『A Pictorial Shizuokaken Tea Indutry』静岡県総合組合中央会議所，1931
- 13 W.H.Ukers, 『ALL ABOUT TEA』I，p234, Tea & Coffee Trade Journal, 1935
- 14 W.H.Ukers, 『ALL ABOUT TEA』I，p235, Tea & Coffee Trade Journal, 1935
- 15 「茶業用語集」『紅茶百年史』全日本紅茶振興会，1977（復刻判『日本茶業史資料集成台十九冊』，文生書院，2003）
- 16 「茶箱製造荷造り及びに装箱法」，村山鎮『茶業通鑑』p163，有隣堂，1900
- 17 明治44年の着色茶絶対輸入禁止令からしばらくしてアメリカが鉛使用を禁止し、中貼りがアルミニウムやその他の素材に変えられた。（静岡大学オールアバウトティー研究会編『日本茶文化大全』p95，知泉書館，2006）
- 18 同様に静岡県茶業組合聯合会議所編『静岡県茶業史』p449，静岡県茶業組合聯合会議所，1916には、大正5年当時の記録もある。「米国、及び加奈陀に対する輸出緑茶の荷造は大部分木箱詰なり、箱はふつう杉板製にして内部に鉛皮（ティレット、錫を展抽したるもの）の袋を箱に密着するやう装置し、これに再製茶を直接詰め包装を施す。Half chest.木箱詰の大部分は『ハーフチェスト』と称するものにして、釜茶は八十封度、籠茶は七十封度を容る、猶注文主の希望に依り六十封度、乃至九十封度を詰ることもあり。Box『ボックス』は小箱詰にして五封度、十五封度、十封度、二十封度、三十封度、三十五封度、四十封度詰等あり。」
 ハーフチェストの詳細も引用しておく。P450「此の茶箱は上下四隅を目張りし四方に花鳥その他の意匠を施せる装飾よう絵紙を貼り、鉛皮を装し茶を詰め、白紙或いは広告的の印刷物を入れ、鉛かわを当て司法よりハンダ付けとし、薄紙を貼り、蓋を為して目貼りす、斯くしたる箱の外面に油を引き（引かざるもあり）アンペラにて包み、前面に（Facing.）蘭字と称する薄葉雁紙に印刷せる商標紙を膠汁にて貼付けし、乾燥後油を引けば蘭字は光沢を生じあたかもアンペラに直接印刷したる観を呈す。背面には商標、番号、品名、仕向地等と（From Japan）の文字を「ステンシル型紙」にて表示す。時には蘭字を用いずして「ステンシル」の表示のみをなすものあり。又「キャップ」面冠せと称し商標紙を貼付したる一面をさらにその面と同大のアンペラにて覆ひ商標紙の損傷を防ぐものあり、此の場合には「キャップ」の上に記号、仕向

け地を刷り込むものとす。」

同書p451には、「ブリキ詰箱」「小袋詰」に関しても記述がある。(下写真は同書より)



- 19 外国商は、フランスミッション取引（モロッコ政府から茶の買い付けを委託された六社による私的な組合を通す取引）の指定商であるオリビエ商会、オッペネメール商会、スパス商会、ロンドン商会、ルイ＝ドライヒス商会、インドシナ商会の六社が参加した。日本側は、日本紅茶株式会社、富士製茶会社等が出席していた。『日本茶貿易百年史』p440, 中央公論事業出版, 1959
- 20 宣伝用ポスター1万2千枚とラベル1万枚は、モロッコとアルジェリア用に制作されたが、サイゴン向け輸出と変更されたので不要となる。『日本茶輸出百年史』p442
- 21 『日本茶輸出百年史』p307, 日本茶輸出組合, 1959
- 22 『日本茶輸出百年史』p310

「二、包装条件

ベニヤ茶箱

内装規格ロール三号紙五〇ポンド以上又はこれと同等以上の防湿効果あるものを用いること。

外装三枚以上の合板を用い、その厚さは三ミリ以上であること。箱の組み立てには内部にさん木を、外部に縁金具を用い堅固にすること。

箱の内側には防湿のため「アルミ」錫箔紙、又はこれらと同等以上の強力なものを用い、十字掛又はそれ以上を完全にしめること。

但し、正味重量三〇ポンド以下の場合にはこの限りでない。

木箱

内装「ベニヤ」の内装と同じ

外装板の厚さ三分以上のものを用いること。荷造りは「ベニヤ」茶箱の場合と同じ。」

- 23 登録商標は最初「おかめ」印を予定したが既登録使用があり、モロッコ現地との打ち合わせで「城」印に決定し登録に至った。輸出組合指定の城印を使用する玉緑茶には遵守事項が定められた。しかし、二番茶を計画生産のもとで生産したが良質の茶が予定量の半分にしか満たなかった（『日本茶輸出百年史』p478）。さらに、「モロッコ茶」後者が各国から茶を輸入してパッケージを造り、そのパッケージにはモロッコ独自の考えによる商標を造ることになっている。従って『城印』などという日本の商標は要らな

- い」と、直ぐに条項から削除された（「茶業通報」昭和24年7月4日）。
- 24 「渋茶一杯（二）」、『茶』No.4, 静岡県茶業会議所, 1952
- 25 『紅茶百年史』p525
- 26 『日本茶輸出百年史』p296
- 27 1930（昭和5）年、旧三菱商事が日本紅茶株式会社の内外一手販売権を取得し輸出を開始した。（株式会社エム・シー・フーズ, ホームページ「会社概要」, 「沿革」, 2016,）
- 28 三井物産は、紅茶輸出のため、静岡紅茶株式会社と牧之原紅茶株式会社と契約を結んでいた。
- 29 相松義男『紅茶と日本茶』p151, 恒文社, 1985
- 30 『紅茶百年史』P534
- 31 『紅茶と日本茶』p166
- 32 『紅茶と日本茶』p167
- 33 輸出向けの玉緑茶（グリ茶）は、中国茶の外見に似せるため、仕上げ工程時に「ガラ」と呼ばれる製茶機械（加熱せずに回転させるだけのもの）にかけ「白ずれ」させていたが、ブラックグリは、この白ずれ作業を行わない玉緑茶のことを指した。
- 34 昭和21年8月～22年5月 貿易庁農水産課調べ（『日本茶輸出百年史』p273）
- 35 『日本茶輸出百年史』p296
- 36 戦時下は製造についても燃料節約のための「戦時製茶法設定要綱」により制限されていたことがわかる。（「戦時製茶法設定要綱」1. 蒸し工程は、「熬熱」または「熱風蒸」とすること。（熬熱とは、灼熱した鉄板の上に生葉を投入して蓋をして蒸熱する方法で、釜蒸しの一種。熱風蒸とは、粗揉機を蒸機に代用して蒸す方法。高温度150度の熱風を吹き込んだ粗揉機に生葉を投入。）2. 粗揉工程は、従来より時間を短縮すること。3. 再乾工程は、従来より時間を短縮すること。4. 精揉工程は省略すること。5. 仕上げ工程についても簡単にすること、例えば、上級茶も木茎が混ざっていても差し支えない、番茶は粉を除去する程度にとどめる。）『日本茶業史』P289
- 37 『紅茶と日本茶』p170
- 38 『日本茶輸出百年史』P270
- 39 『紅茶と日本茶』p172
- 40 『日本茶輸出百年史』p296
- 41 『日本茶輸出百年史』p318, p173
- 42 『日本茶輸出百年史』p229
- 43 『日本茶輸出百年史』p315
- 44 『日本茶輸出百年史』p307
- 45 『日本茶輸出百年史』p327
- 46 『日本茶輸出百年史』p328
- 47 農林省農政局主催の日本茶輸出促進対策協議会を静岡において開催し、決議事項の一つとしてまとめられた。『日本茶輸出百年史』p329
- 48 『日本茶輸出百年史』p341-346
- 49 『紅茶と日本茶』p185
- 50 『紅茶と日本茶』p186

- 51 『紅茶と日本茶』 p140
- 52 『紅茶と日本茶』 p192
- 53 週刊『茶業通報』584号, 1960/ 6 /30
- 54 『日本茶輸出史』 p410
- 55 『日本茶輸出百年史』 p385
- 56 現在は、富士製茶会社の故原崎源三郎氏のご遺族が管理されている。
- 57 日本紅茶株式会社全景写真（静岡市北番町78-1), 『日本紅茶株式会社』, 1951（フェルケール博物館蔵）
- 58 『紅茶百年史』 p529全日本紅茶振興会, 1977（『日本茶業史資料集成』第十九冊）
- 59 『紅茶百年史』 P534
- 60 <http://www.mcfoods.co.jp/company/history>
- 61 『日本茶市場としての仏領北阿弗利加事情』日本茶輸出組合, 1953
- 62 「彼らの云ふ良い茶（CUN MEE）とは、静岡で云ふ牧之原や小笠辺りの初期の良い茶程度のものではない。静岡で云へば川根、本山、森、辺りの内地で本年当り二千円前後に取引される芽合のものである。此の程度の茶を釜炒りにすれば支那茶と匹敵するものも出来、相当な値段もとれるので必ず内地の緑茶の価格と太刀打ち出来る」 p 9, 「GUN POWDERなら現在の静岡の湯蒸しのグリで造ったもので（中略）差しへないらしい」 p 9, 「カサブランカで茶商に（中略）これは『人工着色をしてあるぢやないか』と云ふと『フン、そうか、そんならお前の方でもやりやいいじゃないか、何故やらんのだ』と云ふ」 p 7
- 63 原崎源作『輸出再製茶並ニ其沿革』静岡県再製茶業組合, 1925
- 64 『昭和五年 天皇静岡県内行幸の足跡をたずねて』NPO伊豆学研究会発行, 2016